

審査の結果の要旨

氏名 陳 俊霞

本研究は、中国都市部の祖母 123 人と祖父 101 人を対象に、孫が生まれた直後(T1)及び7ヶ月後(T2)の2時点にて、孫養育型（昼夜群、昼だけ群、育児なし群）により祖父母の責任義務感、主観的幸福感には時間変化に伴う相違があるか、及びT1の主観的幸福感・属性をコントロールしたうえで、孫養育型が祖父母の主観的幸福感に影響を与えるかを明らかにすることを目的に、自記式質問紙調査を行った。下記の結果を得ている。

1. 研究デザインの決定

米国の先行研究では、孫養育に関わる程度と精神的健康との関係を検討する際、対象孫の年齢の幅が広く、孫の発達段階に関する配慮が不十分である。また、祖父母に関する複数のパネル研究では、追跡期間中に孫養育型の変化が生じると、祖父母の抑うつ症状が悪化、改善あるいは変化はしないというさまざまな結果がでていたことが報告されている。この理由として、研究の対象となった孫の年齢及び追跡期間前の孫養育型・孫養育期間の長さがさまざまであり、統一されていないことがあげられる。さらに、中国では孫の出生が家族サイクル中の大きな出来事であり、産婦(孫の母親)の体調の整えること及び継続的孫養育をめぐる、祖父母は重要な役割を果たしている。しかし、産休あけの母親が仕事に戻り、祖父母による支援がもっとも必要とされる中国都市部の乳児期の孫を養育することが、祖父母の負担感および精神的健康に与える影響については明らかにされていない。

そこで、本研究は、乳児期の孫を持つ中国都市部の祖父母の孫養育に焦点を当て、調査時点前の継続的孫養育の影響を除くため、祖父母が孫養育をしていない状態を調査のスタートラインとして、孫養育が経時的祖父母の主観的幸福感に与える影響を検証することにした。

2. 結果の要旨

1) 孫養育型により祖母・祖父の責任義務感・主観的幸福感の2時点変化の結果

孫養育型により祖父母の孫養育の責任義務感、主観的幸福感の変化が異なる場合があることが示された。繰り返しありの二元配置分散分析の結果は以下の通りであった。

祖母では、責任義務感について、孫養育型の主効果および孫養育型と調査時点との交互作用が有意であり、昼夜群と昼だけ群ではT1からT2にかけて責任義務感の得点が増加し、一方育児なし群では得点が減少した。主観的幸福感では、孫養育型と時間の交互作用が見られ、T1からT2にかけて、昼夜群と昼だけ群は主観的幸福感の得点は横ばいであるのに対して、育児なし群では減少していた。

祖父では、2つの変数に対しても、孫養育型と調査時点との交互作用は有意でなかった。責任義務感については、孫養育型の主効果が見られ、昼夜群、昼だけ群では調査期間を通じて、育児なし群に比べて責任義務感の得点が高かった。T1からT2にかけて、3群の責任義務感の得点は減少する傾向にあった。育児なし群の変化のみ有意であった。主観的幸福感については、孫養育型と調査時点の主効果は有意でなかった。

2) 祖母・祖父別にT2の主観的幸福感を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

祖母では「孫養育型」は最初に投入したモデルから最終モデルまでT2の主観的幸福感を有意に予測していた。祖母において、孫養育型の昼夜群は、育児なし群よりT2の主観的幸福感が高くなっていた。昼だけ群でも、育児なし群より主観的幸福感が高い傾向にあった。しかし祖父においては、孫養育型はT2の主観的幸福感と有意に関連しなかった。

最終的重回帰モデルでは、祖母と祖父は、それぞれT2の主観的幸福感の分散(Adjusted R²)の37.4%と41.0%を説明した。祖母では、T1の主観的幸福感、T2のサポート、孫養育をしていること、T2の経済的ゆとりがあることが、T2の主観的幸福感と有意な正の関連を示した。祖父では、修学年数、T2の慢性疾患、T2の家族機能の得点が、T2の主観的幸福感と有意な負の関連を示した。

3) 実践への示唆

孫を養育しないことは、祖母の主観的幸福感の阻害因子であることが示された。今後、中国の祖父母の生活を支援する際に、性別や家族内での祖父と祖母の性役割を考慮した支援が必要である。

以上、本研究はこれまで検討されていない祖父母による支援が必要とされる乳児期の孫を養育することが、経時的祖父母の主観的幸福感に与える影響を明らかにした前例のない研究である。今後、中国の祖父母の生活を支援する際に、孫養育を通じた精神的健康の増進について具体的検討を進めるうえで重要な貢献をすと思われる、学位の授与に値するものと考えられる。